様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　１ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００４２６

研究課題名（和文）モダニズム以降のイギリス文学・文化におけるノスタルジアの情動論的・空間論的研究

研究課題名（英文）Research on the Affective and Spatial Dimensions of Nostalgia in British Literature and Culture after the Age of Modernism

研究代表者
秦　邦生（Shin, Kunio）

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：００４５９３０６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究課題は、モダニズム期以降のイギリス文学・文化におけるさまざまなノスタルジア的表象とその変容を、情動理論ならびに空間的移動という側面から再考した。しばしば退行的と考えられる「ノスタルジア」という情動には空間的越境の経験が刻印されており、解放的可能性もあることを、ジョージ・オーウェル、H・G・ウェルズ、サルマン・ルシュディなどの文学作品を題材にして論証した。主な研究成果は2021年刊行の編著『ジョージ・オーウェル『一九八四年』を読む』（水声社）ならびに2022年刊行の訳書レイモンド・ウィリアムズ『オーウェル』（月曜社）にまとめ、それ以外に英語の口頭発表や学術誌掲載論文などで公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究成果の学術的意義は、退行的と見なされてきた「ノスタルジア」の情動に含まれる肯定的可能性を見出したことにある。その社会的意義は、近年は公的な言説においても注目の集まるジョージ・オーウェルの『一九八四年』をはじめとするユートピア／ディストピア文学の批評的可能性について、ノスタルジアの観点から理解する観点を提供したことである。ディストピア文学はさまざまな政治情勢やメディア環境の変化と関連づけて絶望的な社会状況を描いた物語ジャンルという一面的な理解がまだ支配的である。だがノスタルジアの解放的可能性という論点を踏まえれば、ディストピア文学には希望の萌芽も含まれていることを理解することができる。

研究成果の概要（英文）：　This research project has considered the affective and spatial dimensions of ‘nostalgia’ in British literature and culture after the age of modernism. While nostalgia is often regarded as a rather regressive and conservative emotion, this research has argued that nostalgia also has unexpected liberating potential which results from the experiences of spatial border crossings that often gave rise to the complex affects of nostalgia, as we can observe in the works of diverse writers such as George Orwell, H. G. Wells, and Salman Rushdie. The main achievements of this research are published as a collection of essays, Reading George Orwell’s Nineteen Eighty-Four (Suiseisya, 2022), a translation of Raymond Williams’s Orwell (Getsuyosha, 2022) and a few other presentations and academic papers both in Japanese and English.

研究分野：英文学

キーワード：モダニズム　ノスタルジア　ユートピア　ディストピア　ポストコロニアリズム　アダプテーション　エコロジー

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

「懐旧の念」や「郷愁」と通常訳される「ノスタルジア(nostalgia)」は、特に 1980 年代以降、英米における新保守主義・新自由主義的政権の台頭や、いわゆる「ヘリテージ産業」の隆盛などと関連づけられることによって、強い否定的評価が与えられるようになった。この動向においてノスタルジア的表象は、①現実に存在した社会的諸矛盾を隠蔽する過去の美化、②現在への批判的姿勢を弱める懐古的性格、③ノスタルジア的事物の商品化を通じた大衆消費社会への迎合など、そのイデオロギー的保守性がくりかえし強調されてきた（イデオロギー性については Susan Stewart, *On Longing* [1993]、商品文化については Celeste Olalquiaga, *The Artificial Kingdom* [1998]などを参照）。特に帝国主義の歴史との関連では、人類学者 Renato Rosaldo が“Imperialist Nostalgia” (1989)において、原住民文化の破壊に加担しつつその喪失を惜しむことで、自己の「無垢」をアピールする西洋の欺瞞的姿勢としてノスタルジアを強く批判していた。概してこのような意味でのノスタルジアは、真正な批判を可能にするとされる「歴史意識」と対置されてきたと言えるだろう。

これに対して、研究開始当初の本研究の学術的「問い」は次の通りだった。第一に、ノスタルジアのイデオロギー性を批判する従来の研究は、その情動的側面の複雑性を軽視するところに成立してきたのではないか？　第二に、ノスタルジアを「過去」や「記憶」と連想する従来の研究では、ノスタルジアの契機としての空間的移動の重要性が見過ごされていたのではないか？この二つの着眼点を中心に本研究は、ノスタルジア美学が「歴史」や「空間」との情動的関係性の構築によって、歴史意識を阻害するのではなく、むしろ、大規模な移動が織りなす 20 世紀中葉の歴史的経験に応答しつつ、広い範囲での世界の批判的な再認識を促す情動として、モダニズム以降の文学・文化において模索された可能性を検討するものだった。

２．研究の目的

上述した観点から本研究は、(a)20 世紀中葉の経験に応答するモダニズム以降のイギリス文学・文化の再評価、(b)ノスタルジアに関する文化理論の刷新の二つを目的としていた。前者に関しては、例えば George Orwell は、その社会主義への評価の一方で、イギリス大衆文化への傾倒や共産主義批判が、ナショナリズムや保守的ノスタルジアへの徴候として批判されてきた経緯があった。ところがこの批評史においては、旧イギリス領ビルマ（現ミャンマー）での彼自身の若き日の経験が刺激したノスタルジアが、Orwell 独自の地政学的認識を養い、帝国主義から冷戦へと至る 20 世紀半ばの歴史状況に対する批判意識を研ぎすました可能性が十分に考慮されてきていなかった。また、「意識の流れ(the stream of consciousness)」に代表されるモダニズム的技法は「記憶」や「内面性」の見地から理解されてきたが、それがしばしば空間的移動の帰結として（過去と現在の）時空間(chronotope)の二重化を生み出すことは従来あまり注目されていない。このような見地から本研究は、作家たちの個別・具体的な空間的移動・混乱(dislocation)の経験と、その表現技法とを関連づけ、モダニズム的ノスタルジア美学が一定の批判的可能性を帯びることを論証することを第一の目的とした。

並行する第二の目的として、ノスタルジアの保守性を批判してきた従来の文化理論を見直し、文学・文化研究の方法論の再考を試みることがあった。上述したように、そもそもノスタルジア批判は 80 年代以降の新保守主義の台頭や、映像メディアにおける歴史表象を標的にしてきた経緯があった。このような近年の批評史をその歴史的文脈を踏まえつつ再検討する作業（Fredric Jameson がその大著 *Postmodernism* [1991]において定式化した概念“nostalgia for the present”の再評価を含む）は、ポストモダニズム以降の私たち自身の歴史意識・空間意識を変容させる「情動的方法」としてノスタルジアを再定義する作業に直結する。ノスタルジアの有する一定の大衆的広がりが必ずしも保守性や排他性ではなく、むしろ積極的な歴史意識や空間認識を生み出す可能性もあるのではないか。本研究では、そのような集団的次元におけるノスタルジア的情動の生産的活用を念頭に、再理論化を第二の目的としていた。

３．研究の方法

本研究のアプローチにとってもっとも重要な意義を持ったのは、Svetlana Boym, *The Future of Nostalgia* (2001)におけるノスタルジアの両義性の再評価である。Boym は、ノスタルジアがそもそも *nostos*（帰郷）と algia（痛みを伴う状態）という二つのギリシア語源の合成語であることを一つの根拠に、“restorative nostalgia”と“reflexive nostalgia”という二種類のノスタルジアを区別している。前者の「回復的ノスタルジア」は *nostos*、すなわち（喪失された）共同体の再構築を志向する点で排他性を帯びるが、他方で後者の「自省的ノスタルジア」は *algia*――癒しがたい痛みと渇望――を継続させる点で、大衆的かつ領域横断的な共感を喚起する可能性を有している。この洞察はノスタルジアの本来的両義性を指摘した点で、（前者に代表される）ノスタルジアの保守性にばかり注目してきた従来の研究の死角に入っていた、（後者の）ノスタルジアの情動的次元を明らかにしている。

本研究はこの Boym の洞察を拡張するために、(a)情動論的転回、ならびに(b)空間性の問題を糸口に、モダニズム以降のイギリス文学・文化におけるノスタルジアを再検討することを方法論

として採用した。情動論的転回に関しては、1990 年代半ばの Eve Kosofsky Sedgwick の一連の研究をひとつの端緒として、枚挙にいとまがない程の研究の蓄積がなされている。ところが、Sedgwick の *Touching Feeling* (2003)所収の論考"Paranoid Reading and Reparative Reading" をはじめ、Jonathan Flatley の *Affective Mapping: Melancholia and the Politics of Modernism* (2008)や、Sanja Bahun の *Modernism and Melancholia* (2013)など、モダニズム研究においては喪失経験に応答する情動として、メランコリー（憂鬱）が注目を集める傾向が続いてきた。しかしながら、伝統的に知性や知識人個人と連想されることが多いメランコリーに代えて、ノスタルジアの重要性に注目する本研究は、従来の研究では見過ごされてきたその感傷性や大衆文化との関係に潜在する生産的な可能性にも焦点をあわせることになる。

第二の方法論として重要なのが空間的観点からのノスタルジアの再考である。モダニズム研究において、疎外や喪失感をともなう移民経験が創作に与える影響は、近年では Anna Snaith の *Modernist Voyages* (2014)や Peter J. Kalliney の *Commonwealth of Letters* (2013)など、重要な研究が相次いでいるが、ノスタルジアの問題は十分に検討されていない。だが、Jean Starobinski の "The Idea of Nostalgia" (1966)や哲学者 Edward Casey の"The World of Nostalgia" (1987)において論じられているように、そもそも 17 世紀末に医学用語として使われはじめた「ノスタルジア」とは、故郷から離れたスイス人傭兵たちの空間的欠如・混乱による疾患を指すものだった。19 世紀のロマン主義以降、「過去」や「記憶」との連想が強まってノスタルジアの時間性が強調されてきたが、大規模な移民・移住・難民などを生み出した 20 世紀半ばの歴史的経験は、ノスタルジアの空間的な次元を再び刺激していたのではないだろうか。この観点から本研究は、ノスタルジア美学の地政学的機能を再考した。

４．研究成果

本研究計画の中心的な研究成果は 2021 年度に刊行された編著『ジョージ・オーウェル『一九八四年』を読む――ディストピアからポスト・トゥルースまで』（水声社）である。この編著の編集作業には 2020 年から多くの時間を割き、数多くの共著者たちとともに、序論と後書きのほかに、論文計 11 篇、コラム計 8 篇によって『一九八四年』を多角的に検討した。編者として本研究代表者は、①オーウェルの『一九八四年』ならびに『動物農場』における人間性表象に関する論考一篇、②ディストピア小説の伝統における『一九八四年』の位置付けに関するコラム一篇、③現代においてこの小説を読む意義を論じた序論、④後書きを兼ねた文献案内、⑤翻訳論考の解題、などの執筆を担当した。この編著の執筆・編集に携わった結果、「ノスタルジア」という概念をオーウェルにおける「人間らしさ」の観念と関連付け、さらにそれを自然や動物との関係性からとらえなおす論点、ならびに「古典」としてのテクストを現代との緊張関係のもとに読む方法について認識を深めることができた。

また、2021 年度にはほかに、20 世紀後半に活躍したイギリスの文化批評家レイモンド・ウィリアムズの 1971 年の著作『オーウェル』を翻訳し、2022 年 2 月に月曜社から単行本として刊行した。これと同時に、従来注目されてこなかったオーウェルについてのウィリアムズの短い論考６篇を訳出し、さらに 1940 年代から 80 年代にかけてのウィリアムズのオーウェル観の複雑な変遷を批評史的に整理する論考を訳書の「附論」として執筆した。20 世紀なかばにオーウェルが切り開いた独自の社会主義思想が、20 世紀後半イギリスの主要な文化思想家によってどのような再解釈を受けたのかをたどることができた。

並行して、論集収録の論考の延長線上に、オーウェルの自然観・動物観をさらに掘り下げるために、1920 年代から 30 年代にかけてのオーウェルのイギリス帝国関係の著作（特に最初の小説『ビルマの日々』）をエコロジー的観点から再検討する作業をおこない、2022 年度初頭と 22 年度末に英語と日本語で口頭発表を行った。これらの発表はノスタルジアの問題を近年大きな注目を集めるエコロジカルな危機への問題意識に結びつけ、ディストピア文学とエコロジーとの関係というあらたな研究計画への橋渡しとなった意義深い研究だった。

このほかに本研究計画では、20 世紀なかばのノスタルジアのひとつの引き金となった第一次世界大戦の芸術表象とその流通にも注目し、前衛画家ウィンダム・ルイスや C・R・W・ネヴィンソンの戦争表象が当時どのように受容されたのかについて研究し、特にその戦争表象が『カラー』という当時の美術雑誌という媒体においてどのように流通・受容されていたのかについて論考を英文で刊行した。

また、２０世紀後半のポストモダニズム／ポストコロニアリズムの時代におけるノスタルジアの変容についてはサルマン・ラシュディの小説を対象に研究を進め、移民として故郷を離れた作家ラシュディのインド表象が、西洋読者目線の異国趣味と失われた故郷へのノスタルジアとのあいだに引き裂かれる経緯について、日本語での論考を執筆した。

さらに、過去を「振り返る」ノスタルジアと、過去のさまざまなテクストを「再利用する」アダプテーションとの関係を吟味し、この成果の一部は、2019 年 10 月刊行の論集『イギリス文学と映画』として結実した。この論集では共編者として全体の取りまとめに関わった他、特に①アダプテーション研究の理論的展開について、「はじめに」においてまとめ、②イギリスの作家 J・G・バラードの自伝的小説『太陽の帝国』における、第二次世界大戦ならびに国際都市上海についての倒錯したノスタルジアが、スティーヴン・スピルバーグによるその映画版にどのように継承されているのかを詳細に分析した。これによって文学テクストと映像テクストにおいて「ノスタルジア」的情動がいかに表現されるのかを具体的に検討することができた。

2019 年度末から始まったコロナウイルスの世界的感染症のために、当初は予定していた海外アーカイヴでの調査・研究が思うように進まず、多少の研究計画の変更を迫られはしたものの、全体としてはジョージ・オーウェルを中軸にしつつさまざまな作品をインターテクスト的に読み込む手法によって、20 世紀前半のモダニズムから後半のポストモダニズム・ポストコロニアリズムを横断する、一定の意義のある研究成果を公開できたと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 秦邦生	４．巻 なし
２．論文標題 サルマン・ルシュディ『真夜中の子供たち』――ポストモダン／ポストコロニアルの異国性とノスタルジア	５．発行年 2020年
３．雑誌名 高橋和久・丹治愛編『二〇世紀英国小説の展開』	６．最初と最後の頁 344-368
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 秦邦生	４．巻 9
２．論文標題 ジョージ・オーウェルと「最後の人間」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 レイモンド・ウィリアムズ研究	６．最初と最後の頁 78-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Kunio Shin	４．巻 volume 8
２．論文標題 The Work of Modern British Art in the Age of Colour Reproduction: Wyndham Lewis and C. R. W. Nevinson in Colour, 1914-1921	５．発行年 2019年
３．雑誌名 The Journal of Wyndham Lewis Studies	６．最初と最後の頁 57-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　2件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 秦邦生
２．発表標題 「真理」と翻訳――オーウェルの場合
３．学会等名 表象文化学会オンライン研究フォーラム2020
４．発表年 2020年

１．発表者名 秦邦生
２．発表標題 ステファン・コリーニ『懐古する想像力』をめぐって「趣旨説明」
３．学会等名 文学批評の再検討２
４．発表年 2021年

１．発表者名 秦邦生
２．発表標題 ジョージ・オーウェルと「最後の人間」
３．学会等名 オーウェル『１９８４年』とディストピアのリアル――刊行70周年記念シンポジウム
４．発表年 2019年

１．発表者名 秦邦生
２．発表標題 未来へのノスタルジア――ジョージ・オーウェルの後期モダニズムと「反復」の可能性
３．学会等名 第十三回大東文化大学英文学会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kunio Shin
２．発表標題 Orwell's (Post-)Imperial Ecology
３．学会等名 Critical Orwell, University of Birmingham（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 秦邦生
２．発表標題 『ユリシーズ』とスノッブたち ――ジョイスを読むウルフ、ルイス、オーウェル、そして私たち
３．学会等名 22 Ulyssesージェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』への招待（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 秦邦生
２．発表標題 オーウェルと異郷の森
３．学会等名 「暗闇の中の希望」 オーウェル生誕120周年記念イベント
４．発表年 2023年

〔図書〕　計3件

１．著者名 秦邦生（編）	４．発行年 2021年
２．出版社 水声社	５．総ページ数 314
３．書名 『ジョージ・オーウェル『一九八四年』を読むーディストピアからポスト・トゥルースまで』	

１．著者名 レイモンド・ウィリアムズ／秦邦生訳	４．発行年 2022年
２．出版社 月曜社	５．総ページ数 281
３．書名 『オーウェル』	

１．著者名 松本朗、岩田美喜、木下誠、秦邦生	４．発行年 2019年
２．出版社 三修社	５．総ページ数 408
３．書名 イギリス文学と映画	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関